闘！-INVESTMENT LEGEND-

アクア
イラスト/まりも

闘! - INVESTMENT LEGEND -

目次

序章 …… 3
第１章 …… 18
第２章 …… 38
第３章 …… 58

序章

雀ヶ丘高校の下校時間のチャイムが鳴った。雀ヶ丘高校の生徒、紅　茜が下校している。

茜は雀ヶ丘高校に入学するまで助番だった。助番仲間の高梨　世那、楠木　奈々美と喧嘩に明け暮れていたが、雀ヶ丘高校に入学してから高梨、楠木と離れ離れになってしまったので、喧嘩に明け暮れることがなくなり、平和を愛する高校生になった。

雀ヶ丘高校に入学してから茜は下ろしていた髪を括って、ヘアスタイルをポニーテールにし、喧嘩をしていた時に、嵌めていたグローブは喧嘩を止めたため、外していた。

茜が雀ヶ丘高校の近くにある空き地を通り掛ろうとすると、空き地から二人の話し声が聞こえた。

「おまえが「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった雀ヶ丘高校の生徒、荒波　嵐か」

「そうだ」

「俺は、柳高校の生徒、浅葱　翔だ」

二人は雀ヶ丘高校の生徒、荒波　嵐と柳高校の生徒、浅葱　翔である。

嵐は茜と同じ雀ヶ丘高校の生徒だが、茜は嵐を雀ヶ丘高校に入学してから今まで校内で見かけ

たことがなかったので、知らなかった。
茜が空き地に近づくと、翔が突然飛び上がってから嵐に飛び蹴りをした。
「くっ」
嵐は胸の前で両腕をクロスして翔の飛び蹴りをガードした。
「何しやがる」
嵐は目を吊り上げて怒った。
翔は着地して立ち上がると、
「俺はおまえの過去に、強豪を殴り倒した「闘魂の拳」と呼ばれる拳の力を確かめるために、おまえと勝負がしたくて、ここに来た」
と言った。
「なるほど、俺と勝負がしたいということか、受けて立つぜ」
嵐は翔に喧嘩を売られたので買った。
茜は二人の喧嘩を止めようと空き地に入ったが、二人の強い気迫に押されて、近寄れずにいた。
「行くぜっ」
翔は飛び上がってから嵐に空中から急降下しながら連続して蹴り付けた。
「飛翔蹴り！」
「くっ」

嵐は胸の前で両腕をクロスして翔の飛翔蹴りをガードしたが、弾かれてしまい、まともにくらって倒れた。

「！」

二人の喧嘩を隠れて見ていた茜は驚いて口を押さえた。

翔は着地して立ち上がると、

「どうだ、俺の蹴撃技は」

翔は跳躍力のある蹴撃技を得意としていた。飛翔蹴りは蹴撃技である。

「……効いたぜ」

嵐は起き上がると、ペッと血混じりの唾を地面に吐いた。

「おまえ、強いな」

俺は「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐より強いのかと翔は思った。

嵐の様子を見ると、降参する様子ではない。今まで翔の飛翔蹴りをくらった者は必ず降参していたが、嵐は降参するどころか、翔に対して闘志を燃やしている。

「こんな強い奴とする喧嘩は久しぶりだぜ」

嵐は久しぶりに翔と喧嘩をしている。過去に、強豪を殴り倒してから、しばらく喧嘩をする相手がいなかったので、していなかったからだ。

「行くぜっ」
嵐は拳を握り締めると、翔に向かって走り出し、翔の腹を目掛けてパンチを繰り出したが、翔は嵐のパンチを掌で受け止めた。
「何っ！」
「うおおっ！」
嵐の腕を思いっきり引っ張った瞬間、翔は嵐の腹を膝蹴りした。
「がはっ！」
嵐は蹴られた腹を押さえながら後退りして翔から距離をとった。
「結構やるじゃないか」
「くっ、そちらこそ」
嵐のパンチを受け止めた翔の掌に激痛が走った。これが過去に、強豪を殴り倒した「闘魂の拳」と呼ばれる拳の力なのか。何と凄まじい。まともにくらったらやばかっただろう。強い。嵐は俺より強いと翔は思った。
「まだまだ、これからだぜ」
「あ、ああ」
嵐と翔は互いに向かって走り出し、嵐は連続でパンチを繰り出し、翔は連続でキックを繰り出した。

「うおおおおっ！」
嵐のパンチと翔のキックが交錯した。
「ほお、俺といい勝負をするじゃないか」
「そちらこそ」
嵐と翔は互いに後ろに下がり、距離をとった。
二人が気づくと夕暮れになっていた。
「そろそろ決着をつけないとな」
「そうだな」
二人は構えた。
二人の喧嘩を止められない茜はこれ以上、二人の喧嘩を見ていると、助番だった頃を思い出してしまうので、ここから立ち去ろうとした。喧嘩はもうしないことにした茜にとって、ここはいづらい場所だ。
茜がここから立ち去ろうとした瞬間、二人は互いに向かって走り出した。
翔は嵐に前蹴りを繰り出した。
「！」
「フェイントだ！」
最初の前蹴りはフェイントで、その足を下ろした勢いで飛び上がり、反対の足で前蹴りを繰り

出した。
「二段蹴り！」
二段蹴りは翔の蹴撃技である。
「うおおっ！」
嵐は翔の二段蹴りを片腕でブロックすると、すぐさま拳を握り締め、翔に向かってパンチを繰り出した。
「何だとぉ」
「ストームナックル！」
嵐は翔を殴り、荒く激しく吹く風が吹き飛ばすように吹っ飛ばした。
「うわあああああっ」
翔は吹っ飛び、壁に叩きつけられた。
「！」
茜は驚いて口を押さえた。ここから立ち去ろうとしたが、嵐の強さに恐れ戦いてしまい、動けなくなった。
「どうだ、俺の殴打技は」
嵐は闘魂の拳で殴る殴打技を得意としていた。ストームナックルは殴打技である。
「く、くっ」

これが過去に、強豪を殴り倒した「闘魂の拳」と呼ばれる拳の力。流石、闘魂伝説となった荒波　嵐だ。やっぱり強い。嵐は俺よりやっぱり強いと翔は思った。

翔のダメージは大きい、どうやら立ち上がれそうにない。もうダメだと翔は思った。

「ま、参った。お、俺の負けだ」

翔は降参した。

嵐は微笑みながら、壁に叩きつけられて、座り込んでしまった翔の前に歩を進めた。

「ふふっ、俺の勝ちだな」

勝負は嵐の勝ちとなった。

「お、おまえ、つ、強いな。さ、流石、闘魂伝説となっただけのことはあるな」

「おまえも強いぜ。いい勝負ができて良かったぜ、ほら、立てるか？」

嵐は翔に手を差し伸べた。

「い、痛みが治まるまで、ま、まだ立てないようだ」

「そうか、立てるまで待ってやるよ」

嵐は翔と目線の高さが同じになるよう、しゃがみ込んだ。

「なあ、嵐、俺これからもっと強くなる。だからまた勝負してくれ」

「ああ、いいぜ」

「今回は負けたけど、次回は負けないからな」

「ああ」
翔は嵐のライバルとなって、
「翔、俺と一緒に喧嘩に明け暮れないか？」
と嵐から誘われ、
「俺と、付き合ってくれ」
「いいぜ。これからも宜しく頼むぜ、嵐」
嵐の親友となった。
茜は嵐が翔と喧嘩しているところを見て、「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となったこと、茜と同じ雀ヶ丘高校の生徒だったことを知った。
漸く動けるようになった茜が空き地を出ようとすると、前方から三人の女子学生が、空き地に向かって走って来た。制服が違うので、茜と同じ雀ヶ丘高校の生徒ではない。
「あの、すみません」
「私たち、翔を探しているの」
「どこにいるか、知っていますか？」
三人の女子学生ははぁはぁと息を切らしながら、茜に翔の居場所を尋ねた。
「翔？　あ、ああ、ここにいるよ」
茜は翔が一瞬、誰かと思ったが、ついさっきまで嵐と喧嘩していた奴かと思い出し、三人の女

子学生に言った。
「ありがとう」
三人の女子学生は茜に礼を言うと、空き地に入って行った。茜は三人の女子学生の後を追おうとしたが、喧嘩はしたくないので、嵐に絡まれると厄介だと思い、隠れて様子を見ることにした。
嵐と翔がこれから一緒にどうするかを話し合っていると、三人の女子学生が翔の姿を見つけて駆けつけてきた。
「翔、見つけたわ」
「す、すみれ、や、柳沢、か、柏崎」
三人の女子学生は藤　すみれ、柳沢　梓、柏崎　唯。翔と同じ柳高校の生徒、翔のクラスメイトである。
「いつも一緒に下校していた翔が最近になって、一人で下校しているから、どうしたかと思って」
「どうしてと問いかけても翔は答えてくれない」
「翔が一人で下校して、どこで何をしているのか知りたくなって」
すみれ、梓、唯は翔といつも一緒に下校していたが、最近になって、翔が一人で下校しているので、気になっていた。翔に理由を聞こうとしても、教えてくれない。翔の下校中、どこで何をしているのか、居場所を知りたくなり、探していた。
「そ、それで、お、俺を探していたのか。た、確かめたいことがあったので、喧嘩で勝負をした

い相手を探していたのだ。おまえらを巻き込みたくなかったから」
翔は教えられなかった理由をすみれ、梓、唯に教えた。
「そうだったのね」
すみれ、梓、唯は納得した。
「喧嘩で勝負をしたい相手とは、俺のことだったのか」
「あ、ああ」
翔はずっと前から「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐と喧嘩で勝負したいと思っていた。闘魂伝説は本当にあった話なのだろうか？作り話ではないだろうか？　こんな疑問が浮かび上がってきたので、本当か、確かめたかったからだった。
闘魂伝説は本当だったことが嵐と喧嘩で勝負したことで確かめられた。
「翔、顔、大丈夫？」
すみれは嵐に殴られて、腫れてしまった翔の顔を見て、心配した。
「あ、ああ」
「こいつに思いっきり殴られたのよ、翔、可哀相」
唯は嵐を睨みながら指差して、言った。
「おいおい。俺はこいつに喧嘩を売られたから買った。俺がこいつに喧嘩を売ったのではないの

だよ」
　しゃがみ込んでいた嵐は立ち上がって、困った表情で唯に言った。
「ああ、私の愛しの……」
　唯は私の愛しの翔と言おうとしたが、翔の恋人であるすみれの前では、流石に言えなかった。
唯は翔に片思いしている。
「翔、負けたのね、喧嘩、強いのに」
　梓が残念そうな顔をして言った。
　しばらくの沈黙の後、嵐が口を開いた。
「もう大丈夫か、立てるか？」
　嵐が翔の痛みが治まるまで待ってから結構時間がたっている。
「あ、ああ、もう大丈夫だ、立てるよ」
　痛みが治り、立てるようになった翔はゆっくり立ち上がった。
「さあ、一緒に帰ろうか」
　翔がすみれ、梓、唯に言うと、翔と親友になったから一緒に帰りたいと思った嵐は翔に向かって、
「俺も一緒に帰ってもいいか」
　と言った。

「ああ、いいぜ」
翔は快く答えた。
「翔、この人は？」
すみれは知らない人と一緒に帰ることに抵抗があるので、翔に嵐のことを聞いた。
「こいつは荒波　嵐、俺と同じ喧嘩をしている奴だ。俺、こいつの親友になったから、宜しくしてやってくれ」
翔がすみれに嵐を紹介すると、嵐はウインクをして、
「宜しく」
とすみれだけではなく、梓、唯にも言った。すみれ、梓、唯はウインクをして、
「こちらこそ、宜しく」
と言った。
「すみれ、梓、唯、これまで一緒に下校することができなくて、すまなかった。これからは一緒に下校しような」
「うん」
すみれ、梓、唯は翔の用事が済んだことで、これから翔と一緒に下校することができるので、良かったと思った。
嵐、翔、すみれ、梓、唯は茜がいることに気づかず、空き地を出て帰って行った。茜は嵐、翔、

すみれ、梓、唯の後ろ姿が見えなくなるまでずっと見ていた。

翌日、茜は登校したが、校内に嵐はいなかった。喧嘩はしたくないので、嵐に絡まれると厄介だと思っていた茜は良かったと思った。結局、嵐と会わないまま、下校時間を迎えた。

下校時間になり、茜が校門に向かうと、校門に誰かが立っていた。昨日、空き地で翔と喧嘩をしていた嵐だった。

「よお」

「！」

嵐に声をかけられた茜はびっくりした。関わりたくないので、知らん顔してさっさと校門を出ようとすると嵐はニヤリとして、

「あんた、紅　茜だろ、知っているぜ」

と言った。

「えっ！」

茜は驚いた。知らなかった人が自分を知っている？　何で自分のことを知ってるのか？　と疑問に思ったからだった。

「雀ヶ丘高校に入学するまで助番だっただろ。助番仲間の高梨、楠木と喧嘩に明け暮れていただ

ろ」
「……」
「女にしては強かったから俺、あんたを気に入っていた」
「……」
茜は「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐に自分が雀ヶ丘高校に入学するまで助番だったことを知られている、気に入られているとは思ってもいなかった。
茜はしばらくの間、無言のままだったが、
「茜、俺と一緒に喧嘩に明け暮れないか？」
と嵐から誘われ、自分の中で眠っていた闘争心を呼び起こし、
「ふふっ、いいわね」
と、口を開いた。
こうして茜は嵐と一緒に再び喧嘩に明け暮れることになった。
「これから一緒に喧嘩しに行こうぜ」
「ああ」
ファイティングポーズをとる嵐と肩を並べた茜はグローブを嵌め、嵐と視線を合わせて微笑を浮かべていた。

17 序章

第一章

茜が嵐と一緒に喧嘩に明け暮れることになってから、不登校だった嵐は登校するようになった。
下校時間になると、茜はクラスが違う嵐と一緒に下校するため校門前で待ち合わせて、一緒に校門を出る。
嵐は茜に助番仲間の高梨、楠木と一緒ではないのが気になったので、
「なあ、茜、高梨、楠木と一緒ではないのか」
と聞いてみた。
「ああ、雀ヶ丘高校に入学してから世那、奈々美と離れ離れになってしまってね」
「そうか」
「世那、奈々美と久しぶりに会いたいな」
茜は雀ヶ丘高校に入学してから離れ離れになってしまった助番仲間の高梨、楠木とは随分会っていない。今頃どうしているのかなと思った。
「どこかで会えるといいな」
「ああ。世那、奈々美に会えたら、「昔のように一緒に喧嘩に明け暮れないか？」と誘おうか」
「いいね。喧嘩仲間は集まれば集まるほど楽しいからな」

こうして話をしているうちに、茜と嵐は親しくなった。
茜が嵐と一緒に喧嘩に明け暮れるために強豪を探していると、前方に二人の白百合学園の生徒が歩いているのが見えた。二人のうち一人の後ろ姿に見覚えがある。
「あ、あいつは、奈々美ではないか」
二人のうち一人は茜の助番仲間の楠木である。楠木はクラスメイトの梓　真弓と一緒に下校していた。
茜は嵐と楠木に駆け寄り、
「奈々美、久しぶり」
と声をかけた。
茜に声をかけられた楠木は振り向くと、
「茜」
と言って、真弓と立ち止まった。
「奈々美、久しぶりに会いたかったよ」
「私もよ、茜」
茜は楠木と高梨と三人で喧嘩に明け暮れていた頃の思い出について話した。その中で、ここにはいない高梨のことについて触れると、
「世那、今頃どうしているのかな」

茜は楠木に高梨とは頻繁に連絡を取り合っていたとみて、高梨の現状を知っているのではないかと推測して訊ねたが、
「さあね」
楠木は知らなかったようで、茜にそう答えた。
「奈々美は世那とは頻繁に連絡を取り合っていなかったのか？」
「ええ」
「そうか」
「茜は世那とは頻繁に連絡を取り合っていなかったの？」
「ああ」
「そう。どこかで会えるといいわね」
茜が楠木と嵐の存在を忘れて、夢中になって話していると、嵐は真弓と黙ったまま見つめ合っていた。茜はそんな嵐を見て、いっけね！　と思い、嵐にごめん、ごめんと謝った後、
「嵐、紹介するよ。楠木　奈々美だ」
と言って、楠木を紹介した。
嵐は楠木を見ると、
「俺は荒波　嵐だ。宜しくな」
と言って、挨拶した。

「私は楠木　奈々美よ、宜しくね」
楠木は嵐に挨拶を返した。
「楠木、俺はあんたを知っているぜ。助番だっただろ。助番仲間の茜、高梨と喧嘩に明け暮れていただろ」
「荒波くんが私を知っているなんて、驚いたわ」
楠木は知らなかった人が自分を知っていることに驚きを隠せなかった。
茜、嵐、楠木が話していると、真弓は黙ったまま茜、嵐、楠木を見つめていた。楠木はそんな真弓を見て、茜と嵐に紹介しないといけないと思い、
「茜、嵐、紹介するわ。梓　真弓よ」
と言って、真弓を紹介した。
茜は真弓を見ると、
「私は紅　茜、宜しくな」
と言って、挨拶した。
「私は梓　真弓、宜しく」
真弓は茜に挨拶を返した。
嵐は真弓を見ると、
「俺は荒波　嵐だ。宜しくな」

と言って、挨拶した。
「私は梓　真弓、宜しく」
真弓は嵐に挨拶を返した。
高梨と楠木は茜の助番仲間で、茜と高校で離れ離れになってしまってから、高梨は茜と同じ雀ヶ丘高校に入学するはずだったが、訳あって他校に入学してしまった。その理由は後に明らかになる。茜と楠木は高梨の現状をまだ知らなかった。楠木は白百合学園に入学してからクラスメイトの真弓と仲良くなり、行動を共にするようになった。真弓は楠木と同じ高校のクラスメイトである。弓道をしていて、弓道部がない学校に通っているため、楠木と別行動している時は弓道場に行っている。
「奈々美、昔のように一緒に喧嘩に明け暮れないか？」
茜は楠木を誘った。
「楠木、俺も一緒だぜ」
「荒波くんも一緒なの？」
「ああ、奈々美、嵐は強いよ。「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となったからね」
「そうだったのね、そんな強者とどうして一緒になったの？」
「嵐と同じ高校だからね」

「なるほど」
「奈々美」
茜が呼びかけると、楠木は高校生になって茜と離れ離れになってから喧嘩に明け暮れることがなかったが、「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐と一緒にいる嵐に誘われ、昔、茜と喧嘩に明け暮れていたことを思い出すと、また、茜と喧嘩に明け暮れたくなり、
「いいわね」
と言って、茜と喧嘩に明け暮れることになった。
「奈々美、世那に会えたら、「昔のように一緒に喧嘩に明け暮れないか？」と誘いたいね」
「ええ」
「茜、楠木、高梨とどこかで会えるといいな」
「ああ」
「そうね」
「奈々美、紅さんと久しぶりに会えて、良かったわね」
「ええ、真弓」
「紅さん、荒波くん、奈々美、私もご一緒していいかしら」
「もちろんよ、真弓。ねえ、茜、荒波くん」

「ああ」
「もちろんだ」
「真弓は弓道をしていて、強いのよ」
「それは頼もしいね」
茜、嵐、楠木、真弓はしばらく話した後、「じゃあ、また」と言って、別れた。

翌日、茜と嵐が雀ヶ丘高校の近くにある空き地を通り掛ろうとすると、
「よお、嵐じゃないか」
嵐は空き地にいる翔から声をかけられた。
「翔」
翔はすみれ、梓、唯と一緒にいた。茜と嵐が空き地に足を踏み入れると、すみれ、梓、唯と茜、嵐に駆け寄った。
「嵐、おまえと一緒にいる彼女は誰だ」
翔は茜を見て、嵐にそう言うと、嵐は茜を見て、
「紅　茜だ」
と言って、茜を紹介した。

「紅さんね。私たちが翔を探していた時は翔の居場所を教えてくれて、ありがとう」
嵐から茜の名前を聞いたすみれが茜に礼を言った後、翔がすみれに「おまえらが俺を探していた時って、俺が嵐と喧嘩で勝負をしていた時か？」と訊ねてきたので、すみれは「そうよ」と答えた。
（あ、まずい）
茜は嵐が翔と喧嘩で勝負をしていたところを見ていたことを嵐に黙っていたので、そう思ったが、すでに遅く、
「茜、あんた、俺と翔が喧嘩で勝負をしていたところを見ていたのか？」
と嵐から訊ねられた。
茜は嘘を言うと、すみれ、梓、唯に嘘だとわかってしまうため、
「あ、ああ」
と本当のことを言った。
「そうだったのか、まあ、いいさ。なあ、翔」
「ああ、紅さんが俺とおまえの勝負の邪魔をしたわけではないからな」
茜は嵐と翔にそう言われて安心した。自分が嵐と翔が喧嘩で勝負をしていたところを見ていたことを嵐と翔に知られたら、『俺らの勝負の邪魔をするつもりだっただろ』と疑われるだろうと思ったからである。もちろん、茜は嵐と翔の勝負の邪魔をするつもりはなかった。

「紅さん、私らと互いに紹介をまだしていなかったわね」
すみれが茜にそう言うと、茜は、
「そうだね」
と言った。
あの時、嵐は翔、すみれ、梓、唯と翔と互いに紹介していたが、茜はしていなかった。
「嵐から紹介があったように、私は紅　茜だ。宜しく」
茜は翔、すみれ、梓、唯に挨拶した。
翔は茜を見ると、
「俺は浅葱　翔だ。宜しく、紅さん」
と言って、挨拶した。
「宜しく、浅葱さん」
茜は翔に挨拶を返した。
すみれは茜を見ると、
「私は藤　すみれよ。宜しくね、紅さん」
と言って、挨拶した。
「宜しく、藤さん」
茜はすみれに挨拶を返した。

梓は茜を見ると、
「私は柳沢　梓。宜しく、紅さん」
と言って、挨拶した。
「宜しく、柳沢さん」
茜は梓に挨拶を返した。
唯は茜を見ると、
「私は柏崎　唯。宜しくね、紅さん」
と言って、挨拶した。
「宜しく、柏崎さん」
茜は唯に挨拶を返した。
翔は茜と嵐の関係が気になったので、
「嵐は君の恋人かな？」
と茜に訊ねた。
茜が真っ赤になって、「違うよ」と答えようとすると、嵐は、
「そうだよ」
と答えた。
「そうか」

翔が納得すると、
「ち、違うよ。嵐は私の喧嘩仲間だよ」
茜は答えを慌てて訂正した。
「冗談だよ、茜。言ってみただけだ」
嵐が笑って言うと、茜は、
「そうだよね」
と言って冗談を受け止めた。
「何だ冗談か。俺はてっきり嵐は君の恋人だと思っていたよ」
「だから違うって、喧嘩仲間だって言っただろう」
茜が口調を荒げて言った。
「わかった、わかった。嵐は紅さんの喧嘩仲間か。俺は嵐の喧嘩仲間だから、俺も紅さんの喧嘩仲間になっていいかな」
「もちろんだよ」
こうして翔は嵐に続いて、茜の喧嘩仲間になった。
「良かったな、茜。喧嘩仲間は集まれば集まるほど楽しいからな」
「ああ」
「翔、茜は強いぜ。女だからと言って甘く見ないほうがいいぜ」

「「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となったおまえと一緒にいるくらいだから、そうだろな」
「ああ、俺は強い奴でないと、付き合わないからな」
茜、嵐、翔の話を聞いていたすみれ、梓、唯は、翔が嵐と茜の喧嘩仲間になったので、
「私たちも紅さんの喧嘩仲間になっていいかしら」
「紅さんの喧嘩仲間と言っても、私たち、喧嘩はしないけどさ」
「紅さん、嵐くん、翔を応援するわ」
と言った。
「もちろんだよ」
「紅さん、嵐くん、翔、頑張ってね」
「喧嘩はしなくても、応援してくれると力になるからありがたいよな、茜、翔」
「ああ」
こうしてすみれ、梓、唯は嵐と翔に続いて、喧嘩はしないが、茜、嵐、翔をサポートすることで、茜の喧嘩仲間になった。
茜、嵐、翔、すみれ、梓、唯はしばらく話した後、「じゃあ、また」と言って、別れた。
茜と同じ雀ヶ丘高校から嵐をはじめとして、白百合学園から楠木、真弓、柳高校から翔、すみれ、梓、唯、七人の茜の喧嘩仲間が集結した。

高梨が茜と同じ雀ヶ丘高校に入学していたら、今頃、嵐に「俺と一緒に喧嘩に明け暮れないか？」と誘われ、嵐と一緒に再び喧嘩に明け暮れることになり、茜の喧嘩仲間になっていただろう。

翌日、茜が嵐と一緒に喧嘩に明け暮れるために強豪を探していると、目の前に見覚えのある一人の女子学生が現れた。

「世那」

何と高梨だった。

「誰かと思えば、茜じゃない。一緒にいる彼は誰かしら」

高梨は嵐を見て、茜にそう言うと、茜は嵐を見て、

「荒波　嵐だ」

と言って、嵐を紹介した。

「「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波　嵐ね」

「高梨、俺のことを知っているとは、俺もあんたのことを知っているけどな。助番だっただろ。助番仲間の茜、楠木と喧嘩に明け暮れていただろ」

「私を知っているのね、荒波くん」

「世那、久しぶり」
茜がそう言うと、高梨は茜に向かって隠し持っていたチェーンを振り回し上から叩きつけるように振り下ろした。
「久しぶりの挨拶代わりよ」
「うっ！」
茜が腕をクロスさせ、防御しようとすると、
「茜！」
嵐は茜を庇い、高梨のチェーンを腕で受け止め巻きつけた。
「嵐、すまない、助かったよ」
嵐に助けられた茜は礼を言った。
「高梨、どうして茜を攻撃した？」
嵐が高梨に茜を攻撃した理由を聞くと、高梨は、
「敵対するからよ」
と言った。
「世那、どうして敵対する？」
茜が高梨に敵対する理由を聞くと、高梨は、
「私の学校では「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝

説となった荒波くんを倒そうとしていてね。そんな荒波くんと一緒に関わっているからよ」
と言った。
「何だって」
「高梨、俺を倒そうとしている奴らは強いのか」
「強いわよ」
「おもしれえじゃねえか」
高梨の学校に強豪がいることは強豪を探している嵐にとって、好都合なことだった。
「世那、いつも一緒だった私を倒すというのか」
「ええ」
「奈々美もか」
「荒波くんと一緒に関わっているなら」
「正気か、世那」
「正気よ、茜」
高梨は嵐と関わりのある助番仲間の茜、楠木を倒そうとしている。
（奈々美に世那のことを話さなければならないな）
楠木にいつも一緒だった高梨が嵐と一緒に関わっているという理由で、敵対していることを話したらどう思うだろうか、茜は考えた。楠木は茜、嵐と手を組んで高梨と闘うだろうか？　それ

とも高梨と手を組んで茜、嵐と闘うだろうか？　もし、嵐と一緒に関わっているという理由で、楠木が高梨と手を組んで茜、嵐と闘うことになれば、茜にとって、辛いことになるだろう。茜はそうならないように願っている。

「高梨、俺を倒そうとしているなら、俺は女であろうと容赦はしない」

「女だからって、甘く見ないほうがいいわよ」

「そのほうがいいな、あんたは女にしては強いからな」

嵐と高梨はしばらく睨みあった。

高梨は嵐を倒そうとしているが、「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐は高梨にとって、難敵である。

（荒波くんの強さを確認するために小手調べをする）

そう思った高梨は嵐の腕に巻きつけていたチェーンを自分の手元に戻すと、嵐に向かって走り出した。

「来るか、高梨」

嵐が構えると、高梨は嵐に蹴りを見舞ったが、

「おっと、ストームナックル」

嵐はかわして、高梨にストームナックルを放った。

「かかったわね」

高梨はチェーンをピンと張って嵐のストームナックルを受け止めて、弾き返した。
「何ぃ」
嵐は吹き飛ばされて倒れた。
「チェーントラップにかかったわね、荒波くん」
チェーントラップは相手の攻撃をピンと張ったチェーンで受け止めて、弾き返すことで、相手を吹き飛ばす高梨のチェーンを使った技である。
「やるじゃねぇか。女にしては強いわけだな」
嵐は起き上がると、高梨の強さに納得した。
「さすが「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波くん「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波くんね。凄まじいパンチング、私はチェーンがなかったら大きなダメージを受けていたに違いないわね」
「世那」
茜はじっと嵐と小手調べに闘っている高梨を見つめた。
「行くぜ、高梨」
「こちらこそ行くわよ、荒波くん」
嵐と高梨は互いに向かって走り出し、嵐は連続でパンチを繰り出し、高梨はチェーンによる連

続攻撃を繰り出した。
嵐のパンチと高梨のチェーンが交錯した。
「強いな、高梨」
「荒波くんこそ」
嵐と高梨は互いに後ろに下がり、距離を取った。
「今までは小手調べよ。荒波くんの強さを確認させてもらったわ」
「なるほど、これからが本番ということか？」
嵐が高梨に訊ねると、高梨は「ええ」と答えた後、
「これから闘いが始まるわ」
と言って、立ち去った。
茜は助番仲間の高梨と闘うことになるとは思いもしなかった。
「茜、すまない。俺と一緒に関わっているという理由で、高梨と闘うことになってしまった」
「謝ることはないよ」
「えっ」
「世那はおかしい」
茜は高梨がおかしいと感じた。何か、はわからないが、高梨に意識、態度を変えさせるほどの出来事があった、知らないうちに何かが。

「高梨はおかしいというのか」
「ああ、何か、はわからないが」
「そうか」
「嵐、気にしないでくれ。世那に何かあったんだ。世那を見ていて、いつもの世那じゃないと、はっきりとわかった気がする」
「わかったぜ」
「嵐、私たちを倒そうとしているのは世那一人だけではない。大勢いるはずだ。だから仲間と一緒に力を合わせて闘おう」
「ああ。楠木に高梨のことを話せば、仲間と一緒に力を合わせて闘うさ」
「そうだな。奈々美は私の仲間だからな」
「俺もあんたの仲間だぜ」
「わかっているよ、嵐」
「よし、やってやろうぜ」
　これから「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐を倒そうとしている強豪が現れる。高梨の言う通り、これから闘いが始まる。茜は嵐をはじめとする楠木、真弓、翔、すみれ、梓、唯、七人の喧嘩仲間と協力して、高梨をはじめとする強豪と闘う決意をした。

第二章

（世那が敵対するとは、何かがあったに違いない）
茜がそう思いながら登校していると、
「よお、茜」
と後ろから嵐が声をかけてきた。茜は嵐の声に振り向いて、
「あ、嵐」
と言った。
「どうした、浮かない顔して」
「世那に何があったのか知りたいけど、どうしたらいいのかわからなくてね」
「高梨の学校について調べるといいだろう。高梨に久しぶりに会った時に訊けば良かったが、それどころではなかったからな」
「あ、ああ」
茜は元気がなかった。高梨と闘うのが嫌だからだ。いつも一緒だった仲間と闘うことは茜にとって辛いことだ。
「元気出せよ、茜、俺がついてるだろ」

嵐は茜の肩に手を置いて言った。
「ありがとう、嵐」
嵐は茜の肩に置いた手を離すと、
「さあ、行こうぜ、茜」
と言って、茜と学校へ向かって行った。
茜と嵐が一緒に登校していると、目の前に二人の男子学生が現れた。
「誰だい、おまえたち」
茜が二人の男子学生に訊ねると、
「俺たちは『ダブルウルフ』と呼ばれる刃　狼一と」
「刃　狼二だ」
と二人の男子学生は答えた。二人の男子学生は名前に『狼』がつく双子の兄弟であることから『ダブルウルフ』と呼ばれる刃　狼一、刃　狼二である。
「おい、おまえたち」
「紅　茜と荒波　嵐だな」
「そうだが」
「おまえたち、どうして俺たちを知っている。俺たちはおまえたちを知らないぞ」
「おまえたちのことは高梨さんから聞いたのだ」

「何だって？　おまえたち、世那と同じ学校の生徒なのか？」
茜が狼一と狼二に高梨のことについて訊くと、
「問答無用」
「くらえ！　旋風脚」
狼一と狼二はそう言って、茜と嵐に旋風脚を放った。
「うっ」
「くっ」
茜と嵐は避ける間もなくくらってしまい、倒れてしまった。
「どうだ、俺たちの旋風脚は」
旋風脚は軸足を中心にし、その場で体をコマのように回転させながら相手にダメージを与える技である。
「もう一度、くらえ！」
狼一と狼二が起き上がろうとする茜と嵐に追い打ちをかける旋風脚をもう一度放とうとすると、
「狼一、狼二」
と後ろから茜と同じ制服を着た一人の女子学生が狼一と狼二の名前を呼びながら駆けつけた。
「冴子姉さん」
一人の女子学生は茜、嵐と同じ雀ヶ丘高校の生徒、狼一と狼二の姉、刃　冴子である。茜、嵐

の先輩だ。
「くっ、退くぞ、狼二」
「はい、狼一兄さん」
「逃げるのか、おまえたち」
嵐が狼一と狼二を脅すと、
「おまえたち、今日はこれぐらいにしておいてやる」
「次に会った時はおまえたちを倒す」
狼一と狼二はそう言い残して退却した。
冴子は起き上った茜と嵐に近寄ると、
「私は刃　冴子。怪我は大丈夫かしら」
と声をかけた。
「はい、大丈夫です。私は紅　茜です」
「大丈夫ですよ。僕は荒波　嵐です」
「あなたが「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波　嵐ね。私と同じ学校の生徒だなんて今まで知らなかったわ」
「私も知らなかったのです。嵐は今まで不登校でしたが、私と一緒になってから、登校するようになりましたので」

「そうだったのね」
「冴子さんは狼一と狼二の姉ですか？」
嵐が冴子に訊ねると、
「そう。狼一と狼二は私の双子の兄弟よ」
と冴子は答えた。
刃姉弟の冴子、狼一、狼二は三人揃って嵐、茜と同じ雀ヶ丘高校に入学するはずだった。冴子は嵐、茜と同じ雀ヶ丘高校に入学したのだが、狼一と狼二は訳あって他校に入学してしまった。その理由は後に明らかになる。茜と嵐は狼一と狼二の現状をまだ知らなかったが、これから知っている冴子から聞くことになる。狼一と狼二は姉弟で違う学校に通うようになってから、寮生活をしているため、冴子とは別居している。
「冴子さん、もうすぐ登校時間です」
「さあ、行きましょう」
茜と嵐はそう言うと、冴子と学校へ向かった。
学校に着くと、冴子は茜と嵐に話したいことがあり、今すぐ話したかった。だが、今は登校時間ぎりぎりで時間がないので話せない。昼休みなら時間があるので話せると思い、
「紅さん、荒波くん、昼休みに屋上で話したいことがあるの」
と言った。

「わかりました」
「では、昼休みに屋上で話しましょう」
「またあとで」
茜、嵐、冴子はそう言うと、それぞれの教室へ向かった。

昼休みになると、茜と嵐は屋上へ向かった。
「冴子さん、私たちに何を話すのかな」
「狼一と狼二のことではないか。あいつら、冴子さんが駆けつけたら逃げただろ。何かあるぜ」
狼一と狼二が目の前に現れた時に言ったことを、茜はふと思い出した。
――おまえたちのことは高梨さんから聞いたのだ――
「あいつら、「私たちのことは世那から聞いた」と言っていたな。世那と共通点があるのかもしれない」
「そうかもしれないな」
「行こう、茜、冴子さんが屋上で待っている」
「ああ」
茜と嵐は屋上へ上がった。

「紅さん、荒波くん」
屋上で待っていた冴子が茜と嵐に声をかけた。
「冴子さん」
「僕たちに話したいことを話してください」
茜と嵐が冴子にそう言うと、冴子は話し始めた。
「狼一と狼二のことだけど」
(嵐の言った通り、狼一と狼二のことか)
「狼一と狼二は私たちと同じここ雀ヶ丘高校に入学するはずだった」
「ええっ！」
「では、なぜ他校に入学したのですか？」
「聖堂学園の生徒にコントロールされ、聖堂学園に入学してしまったからよ」
「何ですって？　誰なのですか？」
「合気　光よ」
「合気　光？」
聖堂学園の生徒である合気　光は気迫がある男勝りな女だ。嵐に倒されたかつての強豪だが、嵐は冴子から聞いても、しばらくその記憶から離れているうちに容易に思い出せなくなっていた。合気道をしているので、合気道の技を得意とする。ある日、覚醒し、軽く触れただけで相手をコ

ントロールすることができるようになった。強者をコントロールして、嵐を倒そうとしている。
「聖堂学園とはどのような学校なのですか？」
「「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波くんを倒そうとしている強豪が集まる学校なの」
高梨が敵対する理由を聞いた時に言ったことを、茜はふと思い出した。
――私の学校では「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波くんを倒そうとしていてね――
「そうか、世那が同じことを言っていた。ということは、世那は聖堂学園の生徒だということか」
こうして茜は冴子から聖堂学園のことを聞いたことで、高梨が聖堂学園の生徒だということを知った。
「世那？　誰かしら」
冴子が高梨の名がわからないので、茜に訊ねると、
「高梨　世那です」
と茜は答えた。
「ああ、狼一と狼二の同級生、高梨さんね」
冴子は『世那』という名が狼一と狼二の同級生である高梨の名だということを知って、茜にそう言った。

「世那が狼一と狼二の同級生。そうか、だから狼一と狼二は「私たちのことは世那から聞いた」と言っていたのか」
「高梨はなぜ聖堂学園に入学したのだろうか？」
嵐が狼一と狼二の同級生である高梨のことを知っているだろうと予測して、冴子に訊ねると、冴子は、
「狼一と狼二と同じよ」
と答えた。
「ということは、世那も私たちと同じここ雀ヶ丘高校に入学するはずだった」
「合気にコントロールされ、聖堂学園に入学してしまったからということか」
茜と嵐が冴子に高梨の現状を確認すると、冴子は、
「そう」
と言って、頷いた。
茜、嵐、冴子と同じここ雀ヶ丘高校に入学するはずだった高梨、狼一、狼二は強者であることから、「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐を倒そうとしている聖堂学園の生徒である合気にコントロールされ、聖堂学園に入学してしまった。そのため敵対する嵐と嵐と一緒にいる者を倒そうとしていることから、茜と嵐を攻撃したのだった。

「世那が私に敵対するようになったのは、こういうことだったのか」
「俺のせいだ。すまない、茜。聖堂学園が俺を倒そうとしているからこうなった」
嵐は茜に謝った。
「悪いのは嵐ではないよ、世那をコントロールしている合気だ。世那は合気にコントロールされていなければ、私たちと同じここ雀ヶ丘高校の生徒なのだから」
「茜」
「紅さん、荒波くん、双子の兄弟の狼一と狼二が攻撃したことを姉として代わりに謝らなければならない。ごめんね」
冴子は茜と嵐に謝った。
「私たちに謝ることはないですよ」
「合気にコントロールされているからには、僕たちは狼一と狼二の敵ですから」
「そうではないわ」
「え？」
「狼一と狼二の本意ではないからよ。狼一と狼二は合気さんにコントロールされていなければ、私たちと同じここ雀ヶ丘高校の生徒なのだから」
「冴子さん」
「狼一と狼二はなぜ、冴子さんが駆けつけたら逃げたのでしょうか？」

嵐が理由を訊ねると、冴子は、
「合気さんにコントロールされても、良心が残っているのか、姉である私と闘いたくないからよ」
と答えた。
「なるほど。姉弟愛だからかもしれませんね」
「私、奈々美と聖堂学園へ行く。合気と闘って、世那を連れ戻すよ」
茜は親友であり、助番仲間である高梨を連れ戻すため、高梨と同じ親友であり、助番仲間である楠木と力を合わせて、聖堂学園へ行き、合気と闘う決意をした。
「紅さん、私も聖堂学園へ行くわ。合気さんと闘って、狼一と狼二を連れ戻すわ」
冴子は、離れ離れになった双子の兄弟である狼一と狼二を連れ戻すため、聖堂学園へ行き、合気と闘う決意をした。
嵐は合気が倒したかつての強豪であることを思い出した。
「茜、冴子さん、合気は俺がかつて倒した強豪だ」
「えっ！」
茜と冴子は驚いた。
「嵐が本当にかつて合気を倒したと言うのか」
「ああ。嘘ではない」
「そうだったのね。だから合気さんは荒波くんを倒そうとしているのね」

「合気はそのために、世那を」
「狼一、狼二をコントロールしたということね」
茜と冴子はそう言うと、嵐を倒そうとしているために高梨、狼一、狼二をコントロールしている合気について「許せない！」と怒りをあらわにした。
「合気、俺がかつて倒した時は、相手をコントロールすることができなかった。相手をコントロールすることができるようになったということは、俺がかつて倒した時より強くなっている。俺を倒すためだろう。俺も聖堂学園へ行く。合気とまた闘って、倒す」
嵐は倒したかつての強豪である合気が復讐のために強くなり、自分を倒そうとしていることから、聖堂学園へ行き、合気と闘う決意をした。
「嵐、冴子さん、合気と闘うために聖堂学園へ行こう」
「ああ」
「その前に確かめたいことがあるわ。荒波くんが「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となったことは本当なのか」
「冴子さん、もしかして、嵐と闘いたいのですか」
「ええ、荒波くんと腕試しに闘いたい」
「いいですよ、僕と腕試しに闘えば、本当なのかわかりますよ」
「宜しく、荒波くん」

「こちらこそ、冴子さん」
冴子と嵐はそう言うと、互いに構えた。
「嵐、冴子さん」
茜は腕試しに闘う嵐と冴子を見つめた。
「行くわよ、荒波くん」
冴子は嵐に向かって走り出し、サイドキックを放ったが、嵐はかわして冴子にパンチを放った。
冴子は嵐のパンチを受け止めた後、嵐に突きを放った。
「うっ」
嵐は冴子の突きをくらってぐらつき、後退りした。
(やるな、冴子さん。女だからと言って甘く見ないほうがいいな)
嵐はそう思うと、冴子を甘く見てはならないと判断した。
嵐のパンチを受け止めた冴子の腕に激痛が走った。
(痛い！　これが「闘魂の拳」と呼ばれる拳の威力。まともにくらったら)
冴子は腕を押さえてそう思った。
「行きますよ、冴子さん」
「こちらこそ行くわよ、荒波くん」
嵐と冴子は互いに向かって走り出し、嵐は連続でパンチを繰り出し、冴子は連続で突きを繰り

出した。
嵐のパンチと冴子の突きが交錯した。
（冴子さん、強い。嵐といい闘いをしているわ）
茜は嵐と対等に闘う冴子を見て驚きながらそう思った。
「強いですね。冴子さん」
「荒波くんこそ」
「僕のパンチを受けていたら、本当なのかわかるでしょう」
「まだまだよ」
「そうですか、では、本当だということをそろそろわからせてあげますね」
嵐はそう言うと、拳を強く握った。殴打技であるストームナックルを放とうとしている。
（来る、旋風脚で相殺できるか？　できなければ本当だということがわかるわ）
冴子は構えた。
茜は校舎の時計を見た。十三時十五分。昼休みは十二時五十分から十三時三十五分まで。残り十分しかない。
「嵐、冴子さん、昼休み終了十分前ですよ」
茜が嵐と冴子に時間がないことを伝えると、嵐は、
「冴子さん、時間がありません。ストームナックルで本当だということをわからせてあげましょ

う」
と言って、構えた。
「わかったわ。だからと言って、まともにくらうわけにはいかない。試したいことがあるからね」
「試したいこととは？」
「荒波くんのストームナックルを旋風脚で相殺できるか」
（旋風脚とは狼一と狼二の技だな。冴子さんも。やはり姉弟ということか）
嵐はそう思うと、狼一、狼二と闘うためにストームナックルで旋風脚に対抗できるか試したくなった。
「わかりました。僕も試したいことがあります」
「試したいこととは？」
「ストームナックルで旋風脚に対抗できるか。僕を倒そうとしている狼一、狼二と闘うために」
「そうね。狼一と狼二に「倒す」と言われたからには、狼一、狼二と闘わなければならないものね」
「はい。それでは、行きますよ、冴子さん。ストームナックル！」
嵐は冴子にストームナックルを放った。
「こちらこそ行くわよ、荒波くん。旋風脚！」
冴子は嵐に旋風脚を放った。

嵐のストームナックルと冴子の旋風脚がぶつかり合った。
「うっ！」
嵐は旋風脚の威力でよろめき、地面に片膝をついた。
「きゃっ！」
冴子はストームナックルの威力で吹っ飛んだ。
「冴子さん」
茜は吹っ飛んで来た冴子を受け止めた。冴子と重なり合って後ろに倒れそうになったが、足を踏ん張ってこらえた。
「紅さん、ありがとう」
冴子は茜に礼を言った。もし、茜が受け止めてくれなければ、屋上のフェンスに激突していただろう。
「茜、冴子さん、大丈夫か」
立ち上がった嵐が心配して茜と冴子に駆け寄ると、茜と冴子は「大丈夫」と言って安心させた。
「荒波くん、ストームナックルを旋風脚で相殺できなかったことから、本当だということがわかったわ」
「冴子さん、こちらこそ旋風脚を放った冴子さんを吹っ飛ばすことができたことから、ストームナックルで旋風脚に対抗できることがわかりました。これで狼一、狼二と対等に闘えそうです」

「そうね。狼一、狼二は闘わなければ、連れ戻せないものね」
「そういうことです」
「私、あなたたちと行動を共にするわ。ひとりだとちょっとね」
「ひとりより私たちと三人のほうがいいですよ。あ、あとひとり増えますけど」
茜が言ったあとひとり増えるのは楠木だった。
「宜しくね、紅さん、荒波くん」
「こちらこそ宜しくお願いしますね、冴子さん」
こうして、茜、嵐、冴子は合気にコントロールされた高梨、狼一、狼二を連れ戻すために合気がいる聖堂学園に向かうのだった。

茜が下校途中に空き地で嵐、冴子と合気にコントロールされた高梨、狼一、狼二を連れ戻すために向かう合気がいる聖堂学園について話し合っていると、
「茜」
「紅さん」
茜を見つけた楠木と真弓が空き地に入って来た。
「奈々美、梓さん」

「よお！」
嵐が楠木と真弓に手をあげて挨拶した。
「あら、荒波くん、茜といつも一緒なのね」
「紅さんと仲がいいのね」
「ああ」
冴子は楠木と真弓を誰だろうと思いながらじっと見つめている。
茜は冴子に初対面の楠木と真弓を紹介しないといけないと思い、
「奈々美、梓さん、紹介するよ。刃　冴子さん、私と嵐の先輩だ」
と言って、楠木と真弓を紹介した。
楠木と真弓は冴子を見ると、
「私は楠木　奈々美です。宜しくお願いします」
「私は梓　真弓です。宜しくお願いします」
と言って、挨拶した。
「私は刃　冴子よ、宜しくね」
冴子は楠木と真弓に挨拶を返した。
「奈々美、世那のことなんだけど」
茜は楠木に「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説

となった嵐を倒そうとしている聖堂学園の生徒である合気にコントロールされ、聖堂学園の生徒になり、敵対している高梨のことを話した。
「えっ！　世那が敵？」
楠木は驚きを隠せなかった。
「俺と俺と一緒にいる者を倒そうとしている。俺がかつて合気を倒したから。合気は強者をコントロールして、俺を倒そうとしている。高梨はその一人だ」
「他には？」
楠木が嵐に訊ねると、嵐は、
「冴子さんの双子の兄弟である狼一と狼二だ」
と答えた。
楠木は嵐を倒そうとしているために高梨、狼一、狼二をコントロールしている合気について「許せない！」と怒りをあらわにした。
「茜、合気と闘って、世那を連れ戻すために聖堂学園へ行くんでしょ、私も行くわ」
「私も行くわよ、紅さん」
「奈々美、梓さん」
こうして、楠木と真弓は合気にコントロールされた高梨、狼一、狼二を連れ戻すために合気がいる聖堂学園に向かう茜に協力することになった。

第三章

茜、嵐、楠木、真弓は聖堂学園の場所を知っている冴子に道案内をしてもらいながら聖堂学園へ向かった。
「聖堂学園、どこにあるのかわからないから、知っている人がいて良かったよ。なあ、嵐、奈々美、梓さん」
「そうだな、茜」
「そうね、茜。聖堂学園の場所を知っている冴子さんがいなかったら、私たち闇雲に歩き回っていたわね」
「みんな揃って、聖堂学園に行けると良いわね、紅さん」
「ああ」
と、茜が肯いてから冴子に、
「聖堂学園行ったことがあるのですか？」
と訊ねると、
「いや、初めてよ」
冴子は答えた。

冴子は双子の兄弟である狼一と狼二が聖堂学園に入学したため、聖堂学園の場所を知っているが、まだ行ったことはない。
「そうですか」
「さあ、こっちよ。行きましょう」
「はい」
茜、嵐、楠木、真弓は冴子が指さす方向に従って進んで行った。
しばらく歩いていると、見覚えのある公園が見えてきた。
「ああ、石芝公園」
茜は思い出したように言った。
石芝公園は茜が雀ヶ丘高校に入学するまで助番だった頃、助番仲間の高梨、楠木と喧嘩に明け暮れていた時、公園暮らしをして、時間を過ごした思い出の場所である。
「私たち世那と石芝公園で暮らしていたわね」
「そうだな、奈々美」
茜と楠木は高梨との思い出を語った。それを聞いた嵐が茜に、
「石芝公園は高梨、楠木との思い出の場所なのだな？」
と訊ねると、
「ああ」

茜は答えた。
「さあ、石芝公園を通って、聖堂学園に向かいましょう」
「はい」
茜、嵐、楠木、真弓は先導する冴子と石芝公園を通って、聖堂学園に向かった。
しばらく歩いていると、中国拳法教室が見えてきた。
「私が狼一、狼二と中国拳法を習っていた教室よ。私たち強くなりたいと！　中国拳法を始めたわ」
冴子は狼一と狼二との思い出を語った。それを聞いた茜が冴子に、
「冴子さんが中国拳法教室に通っていた頃、狼一、狼二は冴子さんと一緒にいたのですね？」
と訊ねると、
「そうよ」
冴子は答えた。
（狼一、狼二が聖堂学園の生徒である合気にコントロールされ、聖堂学園に入学してしまったせいで冴子さんは狼一、狼二と離れ離れになってしまった。狼一、狼二を冴子さんの元に連れ戻すためにも合気を倒さねば）
嵐はそう思うと、拳を強く握った。
「さあ、中国拳法教室を通って、聖堂学園に向かいましょう」

「はい」
茜、嵐、楠木、真弓は先導する冴子と中国拳法教室を通って、聖堂学園に向かった。
茜、嵐、冴子、楠木、真弓が聖堂学園の付近に着くと、目の前に両手を広げて行く手を遮る高梨、狼一、狼二が立っていた。
「世那」
「来たわね、茜、奈々美。ここから先は通さないわよ」
茜と楠木は高梨と向き合った。
「狼一、狼二」
「来たな、冴子姉さん」
「いくら冴子姉さんでもここから先を通すわけにはいかない」
冴子は狼一と狼二と向き合った。
「ここから先を通りたければ、おまえたちと闘わなければならないということか」
「そうよ、荒波くん」
高梨はチェーンを構えた。
「おまえたちを合気さんがいる聖堂学園へは行かせない」
「合気さんに代わって、おまえたちを倒す」
狼一と狼二は構えた。

「俺たちは合気を倒して、おまえたちを連れ戻すつもりだった。まさかおまえたちとここで闘うことになるとは。いいだろう」
嵐は拳を握った。
「世那、闘うよ」
「倒してでも連れ戻すわ」
茜と楠木は構えた。
「紅さん、奈々美、力になるわ」
真弓は茜、楠木と肩を並べた。
「あなた、弓道をしているのね」
高梨は真弓の持っている弓矢を見て言った。
「ええ。私の弓矢とあなたのチェーン、どちらが勝つか勝負よ」
真弓は高梨に弓構えをして言った。
「望むところよ」
と高梨は頷いた。
茜は高梨が多人数に対して、少人数で向かったのではとても敵対しがたいだろうと思い、高梨に、
「世那、多勢に無勢だろう」

と言った。
高梨はチェーンを地面に叩きつけながら、
「ふふっ。そんなことはないわ。三人まとめてこのチェーンで叩きつけてあげるから」
と余裕の笑みを浮かべながら言った。
「狼一、狼二、闘うわ。倒してでも連れ戻す」
冴子は構えた。
「冴子さん、相手は二人だから、力になるよ」
嵐は冴子と肩を並べ、構えた。
「冴子姉さん、荒波とグルだったとは」
「冴子姉さんと闘うのは本意ではないが、仕方ない。敵だから倒すために闘う」
狼一と狼二は冴子に向かって言った。
こうして茜、楠木、真弓が高梨と、嵐と冴子が狼一と狼二と闘うことになった。
「世那のチェーントラップにかからないように注意して」
茜は嵐が高梨と小手調べに闘った時にチェーントラップにかかったことを思い出して、楠木と真弓に小声で言った。
楠木と真弓は茜に、
「わかったわ」

と小声で言った。
「何を小声で言っているのかわからないけど、来ないなら、私から行くわよ、チェーンクロス」
高梨は茜、楠木、真弓に向かって走り出し、十字を描くように、チェーンを振り回して茜、楠木、真弓にダメージを与えた。
「うっ」
「きゃっ」
「くっ」
ダメージを受けた茜、楠木、真弓は、地面に片膝をついた。
「三人まとめてこのチェーンで叩きつけてやるわ」
高梨が立ち上がろうとする茜、楠木、真弓に追い打ちをかけるようにチェーンを振り回し上から叩きつけるように振り下ろそうとすると、茜と楠木は蹴りを放って、真弓は弓を振り上げて、高梨を攻撃した。
「うっ」
高梨はくらってよろめいた。その隙に茜、楠木、真弓は立ち上がり、高梨から距離をとった。
「俺は狼一と闘いますので、冴子さんは狼二と闘ってください」
「わかったわ、荒波くん」
冴子は頷いて言った。

「俺と闘うか、荒波。いいだろう。「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となったおまえを倒せば、聖堂学園にとって好都合だからな」
狼一は嵐を指さして言った。
「俺と闘うか、冴子姉さん。いいだろう。姉だからといって遠慮しない」
「私も弟だからといって遠慮しないわ、狼二」
狼二と冴子は互いの顔を見つめて言った。
「行くぜ、荒波」
狼一が嵐に向かって走り出し、突きを放つと、嵐は片腕でブロックした。
「なかなかいい突きだな、狼一。俺のパンチを見舞ってやるぜ」
嵐が狼一にパンチを放つと、狼一は嵐のパンチを受け止め、嵐の顔に突きを放った。
「うっ」
嵐は狼一の突きをくらってぐらつき、後退りした。
「どうした？　俺はまだ、本気を出していないぞ、荒波」
「どうもしないさ。俺もまだ、本気を出していないぜ、狼一」
狼一と嵐は余裕の表情を浮かべて言った。
「さあ、かかって来なさい！　狼二」
冴子は狼二を煽った。

「行くぞ、冴子姉さん」
狼二が冴子に向かって走り出し、突きを放つと、冴子は狼二の突きを受け止め、狼二の顔に突きを放った。
「その程度か、冴子姉さん。俺の蹴りを見舞ってやる」
冴子の突きをくらっても平気な顔をした狼二は冴子に蹴りを放った。
「うっ」
冴子は狼二の蹴りをくらってぐらつき、後退りした。
「昔と比べて弱くなったな、冴子姉さん」
冴子は雀ヶ丘高校に入学するまで、狼一と狼二は聖堂学園に入学するまで、姉弟で一緒に中国拳法教室に通って、中国拳法を習っていたが、離れ離れになってから、冴子はやめて、狼一と狼二は聖堂学園の中国拳法部でやめずに続けていたので、冴子は狼一と狼二より弱くなったということだ。
「くっ、狼二の言うとおりだわ。私が中国拳法をやめていた間、狼一と狼二は中国拳法をやめずに続けていたのだから」
「そうだったのか。じゃあ、俺は冴子姉さんをすぐに倒せるな」
狼二は余裕の笑みを浮かべながら言った。
「私は聖堂学園から狼一と狼二を連れ戻す。ここで倒されるわけにはいかない」

「強がりもそこまでだ！　冴子姉さん」
狼二は冴子に連続でサイドキックを繰り出した。
「くっ」
冴子はくらいながらも、耐えている。
「冴子さん」
嵐が助太刀しようと冴子に駆け寄ろうとすると、
「おっと、俺と闘うんじゃなかったのか、荒波」
狼一は嵐の行く手を阻んだ。
「くっ、狼一」
嵐は狼一を睨んだ。
「あ、荒波くん、わ、私は大丈夫だから、狼一と闘って」
冴子は嵐を見て言った。
「冴子さん、わ、わかりました」
嵐はそう言うと、狼一と向き合った。
狼二は冴子への攻撃をやめると、
「どこが大丈夫だ？　強がりも大概にしろ！　冴子姉さん」
冴子に旋風脚を放った。

冴子は狼二の旋風脚を受け止めた。
「な、何だと」
「狼二、私は聖堂学園から狼一と狼二を連れ戻す。ここで倒されるわけにはいかないと言ったはずよ！」
冴子は狼二を叱責した。
「くっ」
狼二は冴子の気迫に押されて一歩後退りした。
「いいぞ、冴子さん。だが、狼二は俺が腕試しに闘った冴子さんより強いから油断しないでください」
嵐が冴子を励ますと、
「わかったわ、荒波くん」
冴子は頷きながら言った。
「俺たちの強さを思い知らせてやる」
「俺たちは聖堂学園に入学後、中国拳法部に入部し、修業を積んでいるのだ」
狼一と狼二は構えた。
「茜、奈々美、弓道をしているあなた、なかなかやるわね、しかしその程度では私は倒せないわよ」

高梨はチェーンを構えた。
「高梨さん、まだ私は名乗ってなかったわね。私の名前は梓　真弓よ」
真弓は名乗った。高梨が真弓の名前を確認してから真弓に、
「梓　真弓ね。梓さん、私のことを知っているのね？」
と訊ねると、
「ええ。高梨さんのことは紅さんと奈々美から聞いたから知っているわ」
真弓は答えた。
「そうだったのね」
「私は紅さんと奈々美の仲間だから紅さんと奈々美の仲間である高梨さんを連れ戻すために、紅さんと奈々美に協力しているのよ」
「茜と菜々美は私の敵よ。だから倒すの。茜と菜々美の仲間なら梓さんも倒すわ」
「高梨さんは合気さんにコントロールされているのよ！　しっかりして！　敵は合気さんよ！」
真弓は高梨に呼びかけた。
「黙れ！　合気さんのことを悪く言うと、許さないわよ！」
茜が真弓に怒鳴る高梨を見て、楠木に、
「奈々美、世那はやはり呼びかけても、闘って倒さなければダメか」
と訊ねると、

「そのようね、茜」
奈々美は答えた。
「梓さん、私のチェーンと勝負すると言ったわね」
「ええ、高梨さん」
真弓は高梨に弓構えをして言った。
「じゃあ梓さんの弓矢と勝負しましょう」
高梨はチェーンを飛ばした。
「やあー」
真弓は掛け声とともに弓矢を引いて矢を放った。矢が高梨に向かって飛んで行く。
高梨は不敵な笑みを浮かべると、飛ばしたチェーンを手元に引き寄せた。
「えっ？」
真弓は高梨が攻撃をやめたことに驚いた。
「私のチェーンは攻撃するだけのものではないわよ」
高梨はそう言って、飛んで来た矢をチェーンの輪で受け止めた。
「私の矢をチェーンの輪で受け止めるとは」
「梓さんの弓矢はたいしたことないのね」
高梨は矢をチェーンの輪から引き抜くと、真弓の足元に投げ捨てた。

「くっ」
真弓は足元に落ちている矢を拾った。
「世那はチェーンを使用した技が強力だからチェーンを手にしている限り、私たちに勝ち目はないよ」
「茜の言うとおりよ。世那に勝つためにはチェーンを手離させなくてはならないわ」
「そのようね」
茜、楠木、真弓は高梨とどのようにして闘って倒すかを小声で話し合った。
「何を小声で話し合っているのかわからないけど、そろそろ覚悟をしたほうがいいわよ」
「何の覚悟だ、世那」
「もちろん私に倒される覚悟よ、茜」
高梨はチェーンを構えた。
「世那、私たちはここで倒されるわけにはいかないよ」
茜がそう言うと、高梨は茜に、
「私を連れ戻すため？」
と訊ねた。
「そうよ、世那」
楠木は茜の代わりに答えた。

「私たちは世那を連れ戻すよ」
茜は構えた。
「だから世那と闘って倒すわ」
楠木は構えた。
「高梨さん、私の弓矢はまだ負けたわけじゃないわ」
真弓は高梨に弓構えをして言った。
高梨はチェーンを地面に叩きつけながら、
「三人まとめてこのチェーンで叩きつけて倒してやるわ」
と言ってから、茜、楠木、真弓に向かって走り出し、チェーンを振り回し上から叩きつけるように振り下ろした。
茜、楠木、真弓は高梨にチェーンで叩きつけられて、倒れた。
「よしっ！　茜、楠木、梓さんを倒したわ。次は「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波くんを倒す」
高梨が倒れた茜、楠木、真弓から離れた位置で嵐と闘っている狼一に加勢に向かおうとすると、
「ま、待て、世那」
「世那、ま、待って」
「ま、待って、高梨さん」

茜、楠木、真弓はよろめきながら立ち上がり、高梨を引き止めた。
「な、何ぃ。私のチェーンで叩きつけられて立ち上がるとは」
高梨は振り向いて言った。
「私たちはまだ闘えるよ」
「聖堂学園から世那を連れ戻すためにここで倒れるわけにはいかないわ」
茜と楠木は構えた。
「私の弓矢は高梨さんのチェーンには負けないわ」
真弓は高梨に弓構えをして言った。
「どうして」
高梨はなぜ茜、楠木、真弓がチェーンで叩きつけられて、倒れても立ち上がるのか問いただした。
「仲間の絆を取り戻すため」
茜と楠木は口を揃えて言った。
高梨が茜と楠木に、
「仲間の絆？」
と訊ねると、茜と楠木はそうだと答えて、
「世那は私たちの仲間だよ」

「世那、私たちはいつも一緒だったじゃない」
と高梨との絆について語った。
「……」
高梨は何も言わずに黙っていた。
「俺は冴子さんのために狼一を倒すぜ」
「俺のほうこそ、聖堂学園のために荒波を倒す」
嵐と狼一は互いに向かって走り出し、嵐は連続でパンチを繰り出し、狼一は連続で突きを繰り出した。嵐のパンチと狼一の突きが交錯した。
「なかなかやるな」
「そちらこそ」
嵐と狼一は互いに後ろに下がり、距離をとった。
「私は狼一と狼二を連れ戻すために狼二を倒すわ」
「俺のほうこそ、聖堂学園のために冴子姉さんを倒す」
冴子と狼二は互いに向かって走り出し、冴子は連続で突きを繰り出し、狼二は連続で突きを繰り出した。冴子の突きと狼二の突きが交錯した。
中国拳法をやめていた冴子は狼二と闘っているうちに、中国拳法教室に通って、中国拳法を習っていた頃の感覚を取り戻してきた。

「よしっ！」
「さっきまでの冴子姉さんとは違う」
冴子と狼二は互いに後ろに下がり、距離をとった。
「狼二、狼牙技の出番だな」
「狼一兄さん、狼牙技であいつらを倒そうぜ」
狼一と狼二は小声で話し合った。
「冴子さん、あいつら、何を話し合っているのでしょうか」
「わからないわ、荒波くん」
嵐と冴子は耳を傾けたが、聞き取れなかった。
狼一と狼二は互いに目を見合わせて頷くと、嵐と冴子を見た。
「そろそろ二人まとめて狼牙技で倒してやる」
「俺たちが聖堂学園に入学してからあみだした技だ」
狼一と狼二は両手を狼の牙のように構えた。
「狼一と狼二の両手が」
「牙を向く狼のようだわ」
嵐と冴子は狼牙の構えをしている狼一と狼二を見て言った。
「狼牙襲撃拳」

狼一と狼二は嵐と冴子を狼が襲うかの如く襲撃した。狼一は嵐に、狼二は冴子に連続で狼牙の突きを叩き込み、狼の牙のように両手を突き出し、重い一撃をくらわせた。

嵐と冴子は狼一と狼二の狼牙技である狼牙襲撃拳を受けて倒れた。

「よしっ！　「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった荒波を倒したぞ」

「これで俺たちは聖堂学園のトップクラスになれる」

「ああ」

「冴子姉さんは倒したくなかったが、荒波とグルだったから仕方ない」

「狼二、合気さんに報告しよう」

「はい、狼一兄さん」

狼一と狼二が倒れた嵐と冴子に背を向けて、聖堂学園に戻ろうとすると、

「ま、待て、狼一」

「ま、待ちなさい、狼二」

嵐と冴子はよろめきながら立ち上がり、狼一と狼二を引き止めた。

「何だと」

「狼牙襲撃拳をくらって立ち上がるとは」

狼一と狼二は振り向いて言った。

「俺たちはまだ闘えるぜ」
「聖堂学園から狼一と狼二を連れ戻すためにここで倒れるわけにはいかない」
嵐と冴子は構えた。
「なぜだ」
狼一と狼二はなぜ嵐と冴子が狼牙技である狼牙襲撃拳を受けて倒れても立ち上がるのか問いただした。
「冴子さんはおまえたちの姉、おまえたちは冴子さんの双子の兄弟ということは」
「姉弟の絆を取り戻すためよ」
嵐と冴子は交互に言った。
狼一と狼二が口を揃えて冴子に、
「姉弟の絆？」
と訊ねると、嵐と冴子はそうだと答えて、
「冴子さんは姉として、双子の兄弟であるおまえたちのことを大事に思っている」
「狼一、狼二、私たちは幼い頃からずっと一緒だったじゃない」
と狼一と狼二との絆について語った。
「……」
「……」

狼一と狼二は何も言わずに黙っていた。
高梨と闘う茜、楠木、真弓は高梨のチェーンを使用した技に苦戦していた。高梨を攻撃して、チェーントラップにかかると、攻撃を弾き返され、吹っ飛ばされてしまうので、なかなか思うように攻撃することができない。
「奈々美、梓さん、このままでは、世那を攻撃できずにやられてしまう」
「そうね、茜。チェーンを世那の手から離させないと」
(チェーンを世那の手から離させる。あ、そうだわ。私の弓を高梨さんに放つのではなく、高梨さんのチェーンに放てば)
真弓はそう思うと、思いついた作戦を茜と楠木に話した。
「私と奈々美が世那に向かって走り出すと、世那は迎撃するため、チェーンを振り下ろすためにチェーンを振り上げる」
「その瞬間、真弓が弓を世那のチェーンに放って、世那のチェーンを跳ね飛ばし、世那の手から離させる」
「その瞬間、紅さんと奈々美が高梨さんに攻撃する」
「梓さん、いいね。奈々美、これで世那と決着をつけよう」
「そうね。茜」
(あいつら、何を話している)

高梨は自分を倒すための作戦ではないかと思い、何とか会話から聞き取れないかと耳をすませ、茜、楠木、真弓の会話を聞き取ろうとしたが、茜、楠木、真弓は高梨に聞かれないように、話しているため、聞こえなかった。

(まあ、いいわ。私のチェーンに敵わないあいつらが私を倒せるわけがないのだから)

高梨はそう思うと、不敵な笑みを浮かべた。

高梨に背を向けていた茜と楠木は真弓と話し終わると、振り向いて、高梨と向き合った。

「決着をつけよう、世那」

茜と楠木は構えた。

「望むところよ。このチェーンで一気にカタつけてやるわ、茜、奈々美」

高梨はチェーンを構えた。

「……」

真弓は弓を構えず、茜と楠木が高梨に攻撃し、高梨がチェーンを振り上げるのを待っているが、高梨は作戦だということに気づいていない。

「私のチェーンに敵わないあなたたちに私は倒せない」

「それはどうかな」

「行くわよ、世那!」

茜と楠木は高梨に向かって走り出した。

「来るか、茜、菜々美！　迎撃してあげるわ、チェーンクロス」
高梨が十字を描くため、チェーンを斜めに振り上げた瞬間、真弓は弓を構え、高梨のチェーンを狙って弓を放った。真弓が放った弓は高梨のチェーンを跳ね飛ばし、高梨の手から離させた。
「しまった」
高梨が跳ね飛ばされたチェーンを見た瞬間、
「世那、目を覚ませ！」
茜は正拳で、楠木は平手打ちで高梨を同時に攻撃した。
「きゃあっ！」
高梨は茜と楠木の攻撃をまともに受けて転倒した。
「決着をつけてやる、荒波、冴子姉さん」
「この狼牙襲撃拳で」
狼一と狼二は両手を狼の牙のように構えた。
嵐は狼一と狼二に聞かれないように、思いついた作戦を冴子に話した。
「冴子さん、狼一と狼二に俺のストームナックルと冴子さんの旋風脚との両方の技を使った時間差攻撃を仕かけよう」
嵐のストームナックルは攻撃する時間が短い。対する冴子の旋風脚は一度空中に飛び上がってからの攻撃になるので、攻撃する時間が長い。このため、時間差攻撃になる。

「いいわね。私が旋風脚で攻撃すると見せかけて狼一と狼二の注意をそらせ、その隙に荒波くんがストームナックルで攻撃する」
冴子は狼一と狼二に聞かれないように、嵐と話した。
「何をこそこそ話している」
「まあ、いいか。おまえたちは俺たちに倒されるのだから」
狼一と狼二は「ふっ」と乾いた笑みを浮かべた。
「それはどうかな」
「行くわよ、狼一、狼二！」
冴子が狼一と狼二に向かって走り出し、空中に飛び上がった。
「来るか、冴子姉さん！」
冴子は着地した。旋風脚で攻撃すると見せかけて狼一と狼二の注意をそらせた。
「目を覚ませ！　狼一、狼二」
その隙に嵐はストームナックルで狼一と狼二を攻撃した。
「な、何だと」
「うわあっ！」
狼一と狼二は嵐の攻撃をまともに受けて吹っ飛び、倒れた。
「世那」

茜と楠木は倒れている高梨に駆け寄った。
「茜、奈々美、私は一体」
高梨が茜と奈々美の攻撃を受けたことにより、高梨にかけられた合気のコントロールは完全に解けた。
「世那、目を覚ましたようだね」
「あなたは聖堂学園の合気にコントロールされて、荒波くんと荒波くんの仲間である私たちを倒そうとしていたのよ」
「そうだったのね」
世那は立ち上がりながら言った。
「紅さん、奈々美」
真弓は高梨と向かい合わせに立っている茜と楠木に駆け寄った。
「梓さん、作戦がうまくいったよ」
「真弓のおかげで聖堂学園から世那を取り戻せたわ」
「良かった」
真弓は親指を立てて言った。それから、
「はい、高梨さん」
と言って、拾っていた高梨の落としたチェーンを高梨に手渡した。

「確かに受け取ったわ。梓さん、私のチェーンはあなたの弓に勝てなかったわね」
高梨は真弓に悔しそうな表情を見せながら言った。
「ええ。でも、高梨さん、あなたのチェーンは強かったわ。私の弓があなたのチェーンに勝てたのは、作戦がうまくいったからよ」
「世那、私たちは仲間だから、もう闘うことはないよ」
「世那、真弓は私の親友だから、真弓も私たちの仲間よ」
「茜、奈々美、うん」
高梨は頷いて言った。
「改めて宜しく、高梨さん」
「こちらこそ、梓さん」
真弓と高梨は互いに見つめ合いながら言った。
茜と楠木は真弓の協力によって、合気にコントロールされた高梨を倒すことによって、高梨との助番仲間の絆を取り戻した。
「私たちは仲間だよ」
「もう離れ離れにはならないわ」
「いつも一緒よ」
茜、楠木、高梨を見つめる真弓の前で、茜、楠木、高梨は手を繋いだ。

「狼一、狼二」
嵐、冴子は倒れている狼一と狼二に駆け寄った。
「荒波、冴子姉さん、俺たちは一体」
狼一と狼二が嵐の攻撃を受けたことにより、狼一と狼二にかけられた合気のコントロールは完全に解けた。
「狼一、狼二、目を覚ましたようだな」
「あなたたちは聖堂学園の合気さんにコントロールされて、荒波くんと荒波くんの仲間である私たちを倒そうとしていたのよ」
「そうだったのか」
狼一と狼二は立ち上がりながら声を揃えて言った。
「狼一、狼二、強かったな。いい闘いだったぜ」
嵐は親指を立てて言った。
「そんなことないさ、荒波」
狼一は首を横に振った。
「俺たちは「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となったおまえに敵わなかったのだから」
狼二は首を横に振った。

嵐が狼一と狼二に、
「俺がおまえたちを倒せたのは、作戦がうまくいったからだ」
と言ってから冴子に、
「そうですよね？　冴子さん」
と訊ねると、
「そうね」
冴子は答えた。
「狼一、狼二、私たちは姉弟だから、もう闘うことはないわよ」
「冴子姉さん、うん」
狼一と狼二は頷いて声を揃えて言った。
「荒波くんのおかげで聖堂学園から狼一と狼二を取り戻せたわ」
「良かったですね」
嵐は親指を立てて言った。
冴子は嵐の協力によって、合気にコントロールされた狼一と狼二を倒すことによって、狼一と狼二との姉弟の絆を取り戻した。
「私たちは姉弟よ。もう離れ離れにはならないわ。ずっと一緒よ」
冴子、狼一、狼二を見つめる嵐の前で、冴子、狼一、狼二は手を繋いだ。

別行動していた茜、楠木、真弓、高梨は嵐、冴子、狼一、狼二と合流した。
「冴子さん、聖堂学園から狼一と狼二を連れ戻せて良かったですね」
茜が冴子に笑顔で言うと、冴子は、
「紅さんこそ、聖堂学園から高梨さんを連れ戻せて良かったね」
と笑顔で言い返した。
「茜、私、聖堂学園から雀ヶ丘高校に転校するわ。雀ヶ丘高校に入学することになっていたからね」
「ああ。世那が私と同じ高校の生徒になったら、いつも一緒だからいいな」
茜は親指を立てて言った。
「私は茜と違う高校の生徒だけどね」
茜が楠木に、
「奈々美、私と違う高校の生徒でも、いつも一緒だよ」
と言ってから高梨に、
「そうだよね？　世那」
と訊ねると、
「そうよ」
高梨は答えた。

「冴子姉さん、俺たち、聖堂学園から雀ヶ丘高校に転校するよ」
「雀ヶ丘高校に入学することになっていたから」
「ええ。狼一と狼二が私と同じ高校の生徒になったら、ずっと一緒だからいいわね」
冴子は親指を立てて言った。
「よし、このまま聖堂学園へ行かず、引き返そう」
茜は高梨、狼一、狼二が聖堂学園から雀ヶ丘高校に転校するため、冴子、楠木、真弓と聖堂学園に直行せず、引き返した。

高梨、狼一、狼二が聖堂学園から雀ヶ丘高校に転校し、高梨は茜の同級生、狼一と狼二は茜と嵐の同期生になった。
「世那、私の同級生になったからいつも一緒だね」
「ええ」
茜と高梨は手を繋いだ。
「狼一、狼二、茜と俺の同期生になったな。これからおまえたちは茜と俺の仲間だぜ」
嵐が狼一と狼二に手を差し伸べると、狼一、狼二は、
「ああ」

と声を揃えて言って、嵐と握手を交わした。
休み時間に茜、嵐、高梨、狼一、狼二が廊下を歩いていると、背後から声をかけられた。
「紅さん、荒波くん、高梨さん、狼一、狼二」
それは、冴子だった。
茜、嵐、高梨、狼一、狼二は振り向いて駆け寄った。
高梨、狼一、狼二は互いに見つめ合って頷くと、茜、嵐、冴子に、
「聖堂学園の強豪は合気さんの他にいるわ。聖堂　護、聖堂　猟、隼　瞬、滝口　竜、服部　桜よ」
「荒波に倒されたかつての強豪は合気さんの他にいるぞ。剣豪　武、剛健　豪だ」
と話した。
聖堂学園の強豪である聖堂　護は聖堂学園の生徒会長であり、他の学校を支配し、「闘魂の拳」と呼ばれる拳を握り、過去に、強豪を殴り倒したことから、闘魂伝説となった嵐を倒そうと、企んでいる。聖堂　猟、隼　瞬、滝口　竜、服部　桜は合気同様、聖堂学園の生徒で、護が率いる四天王である。
嵐に倒されたかつての強豪である剣豪、剛剣豪　武、剛健　豪健は聖堂学園の支配下にある白鷹高校の生徒で、合気同様、復讐のために強くなり、嵐を倒そうとしている。
「世那、聖堂学園の強豪はやはり合気だけではないということだね」

「俺に倒されたかつての強豪はやはり合気だけではなく、剣豪と剛健もいるのか」
「護は自ら闘うことはないわ。だから自分の代わりに闘ってくれる四天王を率いているの」
茜が高梨に、
「護が率いる四天王って、猟、隼、滝口、桜だね？」
と訊ねると、
「そうよ」
高梨は答えた。
冴子が嵐に、
「荒波くん、狼一、狼二が話したことは本当なの？」
と訊ねると、
「本当です」
嵐は答えた。
茜が剣豪と剛健も合気と同様、嵐がかつて倒した時より強くなっているということかと問うと、嵐は頷き、
「恐らく、そうだろう」
と茜に言った。
「私は茜と奈々美を倒すために、茜と奈々美との仲間の絆を引き裂いた合気さんを許せないわ」

高梨は合気に憤って言った。
「世那」
茜は高梨を見つめながら言った。
「俺たちは冴子姉さんを倒すために、冴子姉さんとの姉弟の絆を引き裂いた合気さんを許せない」
狼一と狼二は合気に憤って言った。
「狼一、狼二」
冴子は狼一と狼二を見つめながら言った。
「護、猟、隼、滝口、桜、合気、剣豪、剛健との闘いは俺の闘いだ。俺、一人で闘う」
嵐は拳を握りしめて言った。
「みんなの闘いだ。みんなで闘う」
茜は拳を握りしめて言った。
「茜、おまえ」
嵐は茜の手首を掴んで言った。
「茜の言うとおりよ、荒波くん。護、猟、隼、滝口、桜、合気、剣豪、剛健は荒波くんだけはなく、私たちも倒そうとしているのだから、私は闘うわ」
高梨はチェーンを構えて言った。
冴子、狼一、狼二は高梨に同意すると言わんばかりに頷いた。

「高梨、冴子さん、狼一、狼二、ああ、茜の言うとおりだな」
嵐は掴んでいた茜の手首を離して言った。
茜は高梨、冴子、狼一、狼二と嵐と共に護、猟、隼、滝口、桜、合気、剣豪、剛健と闘うことを決意した。
「私は奈々美と世那との仲間の絆は誰にも引き裂けないようにするよ」
「茜、私も。もちろん、奈々美も」
「世那、うん」
茜と高梨は手を繋いだ。
楠木は雀ヶ丘高校ではなく、白百合学園の生徒なので、雀ヶ丘高校にはいないが、茜と高梨は楠木がいつもそばにいると思っている。
「私は狼一、狼二との仲間の絆は誰にも引き裂けないようにするわよ」
「冴子姉さん」
「俺たちも」
「狼一、狼二、ええ」
冴子、狼一、狼二は手を繋いだ。
冴子は狼一と狼二が聖堂学園から雀ヶ丘高校に転校したことで、同じ雀ヶ丘高校の生徒として、姉弟として、もう二度と、離れ離れにならないように願った。

闘！－ INVESTMENT LEGEND －

著　　者　アクア

イラスト　まりも

発 行 日　2018年9月4日

メ ー ル　webaqua@iris.ocn.ne.jp

ウ ェ ブ　http://www.webaqua.server-shared.com/

※無断転載・複製・複写・ウェブ上でのアップロード、
ネットオークション・フリマアプリでの転売禁止。